

## 行事案内

### 博物館文化講座

- 「沖縄の獅子（シーサー）」  
講師：長嶺 操（興南高校教諭）  
期日：1月28日（土）
- 「沖縄の両生・は虫類」  
講師：当山昌直（当館学芸員）  
期日：2月25日（土）
- 「那覇の今昔」  
講師：崎間麗進（県文化財保護審議  
会専門委員）  
期日：3月24日（土）

## 新年にあたって

館長 大城立裕

1984年の新春にあたってご挨拶いたします。はじめに私的なことで恐縮ですが、私が就任して1年が過ぎようとしています。博物館の仕事というものは、遠くで見るより難しくもあり、面白くもあるものだということが、わかりました。

与えられた人的、物的条件のなかで、資料を理想的に収集、保存して、観客や研究者の要望にできるだけ応じるようにつとめてはいますが、まだまだ不十分です。

この足りなさをよく知るために、観客の意向を調べる努力もしていますが、改善にはまだ手がとどきません。

予算要求などの内部事情の問題はともかく、昭和62年の「海邦国体」までには一応の整備ができるように努力するつもりでありますので、ご協力をたまわりますよう、お願いいたします。

## 沖縄県・熊本県交流展

# 「沖縄の美—風土と美術工芸」開かる



テープカット

去る11月8日から12月11日まで熊本市の熊本県立美術館で、沖縄県・熊本県の交流展「沖縄の美—風土と美術工芸」が開催されました。

当県と熊本県の間には、早くからあたたかい関係が続いておりましたが、特に第2次大戦中県民が熊本へ疎開し、親身のお世話を受けたことから、より強い絆で結ばれています。両県は、沖縄の祖国復帰を契機として、「熊本・沖縄県連絡協議会」を結成しました。昭和56年度の会議で、「収蔵品を交換展示して芸術文化の交流を深め、新しい地方文化創造の活性化にする」ことを目的として、「交流展」の開催が提案されました。

その決議に基づいて、昭和57年度は、10月30日から11月28日までの一ヵ月間、当館において、「熊本県の歴史と文化」が催されました。旧細川家ゆかりの永青文庫をはじめ、熊本県下の寺社や資料館、美術館、博物館、教育委員会や個人収集家の協力を得て、凡そ800点の資料が初めて海を渡り、展示されたわけでした。

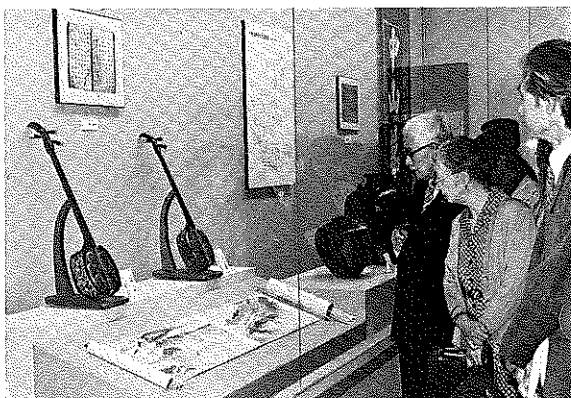
今回は、沖縄の自然や文化を熊本県民に紹介することになり、自然が110種(220点)、考古42点、歴史31点、書画20点、染織48点、漆器62点、陶器26点、民俗54点の合計508点が展示されました。展示場は、本館2階の3室と別館が当てられました。まず、本館の第1室に、考古・歴史・美術を、第2室に染織、第3室に漆器と陶器を展示しました。また別館には、自然・民俗・疎開資料をそれぞれ展示しました。

出品物は、当館の収蔵品を主軸に、足りない部分、または弱い部分を補強する意味で東京国立博物館を

はじめとして、徳川黎明会、日本民芸館、サントリ—美術館、大和文華館から貴重な資料を借用展示しました。また、県内の図書館や市立博物館、資料館、教育委員会や個人の所蔵家の協力も受けました。

この中には、国の重要文化財3点をはじめとして、県指定文化財20点、国指定特別天然記念物2件、国指定天然記念物5件、県指定天然記念物5件が含まれ、そのほか多くの貴重な資料が出品されました。

こうして飾りつけが整った11月8日午前10時から開会式が催され、沖縄県から比嘉副知事や新垣教育長、大城館長らが出席し、熊本県の藤本副知事らと共にテープカットにのぞみました。会場には、熊本在住の沖縄県人会の人たちや多くの熊本県民の関係者が集まり、にぎわいました。開会に引続いて催された講演会では、大城立裕館長が「沖縄文化の特質」、日本民芸館顧問柳悦孝氏が「沖縄の美術工芸—染織—」と題して講演しました。



展示観覧風景

疎開コーナーの写真や取り交わした手紙の前では、目頭をおさえる人もいました。子どもたちには、ヤンバルクイナやイリオモテヤマネコに人気があり、女性の観客には、素朴な美しさをもつ染物や織物に人気集中していました。



## 資料紹介

## 美術工芸

## 牡丹文様紅型衣裳

昭和58年度の資料購入費で、沖縄の染織資料64点を購入し、収蔵しました。

その内訳は、紅型衣裳1点、絹色緋着物2点、家紋入大風呂敷2点、読谷山ティーサージ3点、読谷山花織ウッチャキー3点、桐板着物6点、芭蕉布着物32点、その他15点となっています。

これらの資料は、ほとんどが大正期以前のものであり、展示や研究用に貴重な資料となることでしょう。桐板や芭蕉布の着物の中には、綾の中や経縞模様の上へ型染めしたのがあり、大正、昭和初期によく行われた手法だといわれ、参考になります。

また、芭蕉着物では、綾の中や経緋、横緋があり、現代的な漸新なデザインがあるのに驚かされます。

その中に、写真の「牡丹紅型文様衣裳」があります。これは木綿地の白地型で、牡丹だけの単一の模様で全体を構成した珍しいものです。とはいっても、同一の型紙を使用したと思われるのが、他に2点確認されています。その一つは、奈良県の大和文華館蔵のもので、あと一つは東京国立博物館蔵の「牡丹文



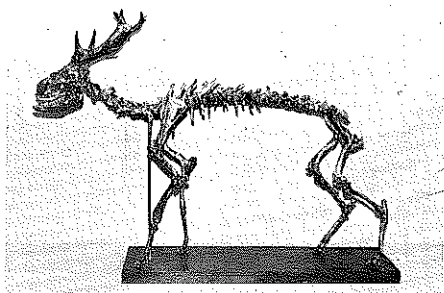
牡丹文様紅型衣裳

様衣裳」です。ただ、同一の型紙を使いながら、配色が全く異っています。

これら染織資料の全体的な紹介は、4月の「新収蔵品展」に行う予定です。

## 資料紹介

## 地学

化石鹿類および<sup>キョン</sup>羗類の復元骨格

リュウキュウジカの復元骨格

本県の鹿および羗類化石について、最初の報告を行ったのは松本彦七郎博士(1926年)です。その発見以来、化石の産地は相次ぎ、現在120ヶ所が知られています。それぞれの種類について、その詳細な事は研究中であるが、これまでにリュウキュウジカ、リュウキュウムカシキョン、キシヤバムカシキョンそしてミヤコノロジカが確認されています。化石は、第四紀更新世の琉球石灰岩中に形成された洞穴あるい

は割れ目(フィッシャー)を満たした堆積物から産し、いずれの種類も2~3万年前に絶滅したものと推測されている。なお、リュウキュウジカの化石は、県下全域から出土し、ミヤコノロジカは宮古諸島からのみ出土しています。特に、後者は北方系の種類であり、琉球列島の地史に興味ある問題を提提供するものです。

当館では、これまで採集した化石をもとに骨格の組立復元を試みた。数万点の化石骨の中から、それぞれの種類の分類、幼獣・老獣及び性別の区別などのため莫大な時間を要したが、長谷川善和(横国大教授)や野原朝秀(琉大教授)先生等の御協力によりリュウキュウジカのメス・オス、リュウキュウムカシキョンのメス・オス、それにミヤコノロジカのオス頭部を復元することができた。標本は、それぞれレプリカを作製し、自然展示室で展示公開しています。これは、わが国における唯一の標本です。

なお、復元に際しては、久米島具志川村や伊江島の各教育委員会の御協力も得ました。

# 校外学習の場としての博物館

## ——自然室の見学をおして——

※  
鳥袋守茂

### 1. 県立博物館自然室の展示項目と内容

県立博物館に待望の“自然室”が誕生したのは昭和57年の初夏5月であった。

ブッソウゲやデイゴの花が真紅に咲きほこる頃に生れた県内唯一の本格的な自然室である。自然史担当職員の努力と、自然展示室の誕生を切望してきた方々の協力の結晶の賜物である。

沖縄の豊富な自然資料を網羅した展示室としては十分な広さがない部屋ではあるが、展示項目とその内容は児童・生徒の、自然学習に大きな助けとなるものである。

南北に細長い日本列島の南端部に位置する私たちの「身近な自然」は、日本の他の地域にみられない、特異な自然環境をもち、そこに生息または生育する動・植物の種類やその生態には独特なものが少なくない。

当自然室においては“豊富で特異な沖縄の自然”をどのように展示したらみやすく、かつわかりやすいかが話合われ、その結果、次のような項目の見出しで内容が配列されている。

#### 1) 島じまの地質

沖縄の島じまで見られる岩石(たい積岩、火成岩、変成岩)、鉱物、化石、化石人骨

#### 2) サンゴ礁から海浜まで

サンゴ礁の生物I、サンゴ礁の生物II、磯の生物→砂浜の生物→マングローブの生物

#### 3) 集落とその周辺の生物

人家周辺の動・植物の種類とその生態、動物たち(鳥類、両生類、は虫類、昆虫類、クモ類、陸産貝類など)

植物たち(草のなかま、木のなかま、道ばたの雑草たち、屋敷林など)

#### 4) 島しょ河川の生物

自然度の高い河川環境と生物たち、汚染度の高い川の実態と生息する生物

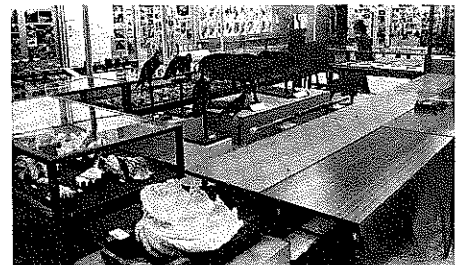
#### 5) 低地の生物

低地帯の石灰岩および非石灰岩地域の環境とそこに生活する生物たち、洞穴生物など。

#### 6) 山地の生物

国頭(ヤンバル)の森林及び西表島の原生林(山地と溪谷)の生物たち、天然記念物のノグチゲラのはく製標本及び巣の内部構造を示す巣穴木の縦断面なども展示。

その他、展示場中央部には沖縄の海産貝類、比較標本としての中国南部や東南アジアの両生類、は虫類も紹介している。また、沖縄の代表的なほ乳類鳥類のりっぱなはく製標本などは深く印象に残るものである。



自然展示室

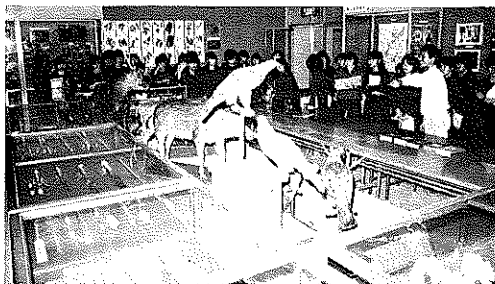
### 2. 博物館での学習活動の計画と実践

自然室が設置された昭和57学年度から、博物館での学習を計画し、授業の年間計画(及び学校の年間行事計画)を立案して、実施した記録の概要を述べる。

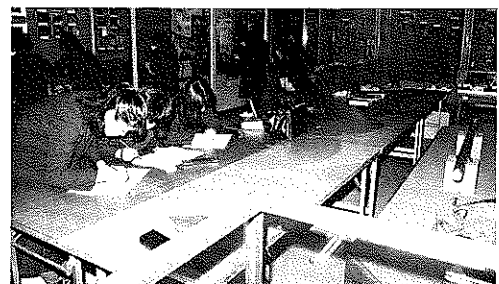
昭和57学年度は高等学校における新教育課程が実施された初年度に当たり、「理科I」学習の中で「身近な自然観察」と「校外活動」を計画した。

#### 実施の概要

- 1) 対象：1年家政科2クラス(70人)
- 2) 読書指導：11月、沖縄の自然に関する読書感想文を作成
- 3) 野外観察の事前準備：1月、身近な自然の紹介



見学風景—展示の説明を聞く



見学風景—課題にとりくむ

及び観察の方法

- 4) 野外観察の実施：2月、校庭の雑草及び林の主として植物を観察して記録する。  
5) 校外活動：3月、県立博物館の展示資料を見学し、レポートを作成する。

事前準備：①バスの予約（片道）

②見学用課題の作成とHR担任との打ち合わせ

③ほとんどの生徒が博物館学習は初めてのなので、本人及び保護者に内容の説明と諸注意

当日の日程

- 9：00 学校集合、点呼、出発  
10：30 課題配布、入館  
10：35～11：00 館内の説明（スライド）  
11：10～12：30 自然室見学（個人別学習課題）  
12：30～13：10 昼食（弁当持参）  
13：10～14：20 見学（自然室以外の展示見学）

14：30 集合、点呼、課題提出、解散

6) 生徒の感想

「郷土の自然に関する展示資料を見学して」という題の感想に対し、生徒が記録した主なるものは次の通りである。

- 項目ごとに展示され、わかりやすい。
  - 学校の授業では学ぶことが出来ないことが多く、勉強になった。
  - 郷土の自然に対して、これまであまりにも知らなすぎた。
  - はく製標本をみて感動した。
  - 写真や実物が多く、なじみやすい。
  - 沖縄の自然を大切にしていきたい。
  - 身近な生物でありながら知らないものが多い。
  - このような展示が中部にあってほしい。
  - レポート作成につかれたが興味がわいてきた。
- そして、多くの生徒が機会があれば再び見学をしたいと望んでいることは、自然室が高く評価されて、よろこばしいことである。（※県立前原高校教諭）

## 博物館の見学雑感

宮里朝光

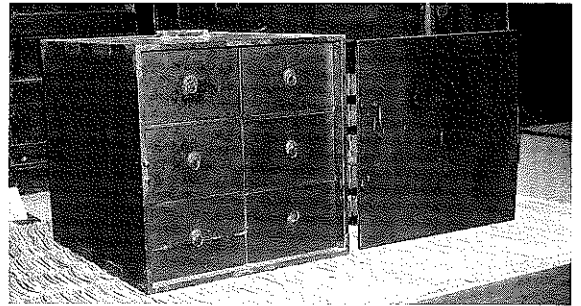
博物館は、先祖の温かい心が感じられ、安心感を覚え、時間のたつのを忘れさせる。

12月7日、友の会から博物館に図書を贈呈したので、ついでに館内を一巡した。ちょうど熊本市で「沖縄の美」展が開催中なので、いい物はないだろうと思っていたのに立派な作品が展示されているのにはびっくりした。展示品を見るとただ感慨無量である。

2階の民俗室の右奥にはたんすの上に懸硯（かけすずり、カキシジリ、船だんすの一つ、金庫、右開きの前面片開き戸）がある。懸硯には硯を収める硯箱もあって、小型で懸子（かけご、ナカグ）をもちさげ手がついている。これをカキシジリグワーといい、普通の硯箱はシジリバクといって区別する。

懸硯（金庫）に以たものに見台（チンデー、本箱の一つ、非常持出用、上開きの前面片開き戸）がある。見台は戸を上にはっきり返し斜めに固定して書見できるように作られた所が異なる。いずれも旅行の際にはしゅろ縄の網で包む。明治初年、祖父が中国のびん江で遭難した際、これらが次々に浮んできたので、ほとんど回収ができたそうである。普通に見る見台をチンデーグワー（小見台）という。本箱には見台の外に書物だんすやけどん形本箱がある。後者が一般的である。

民俗室の懸硯の前に机（シュク、文机、天神机）がある。机は、朱漆や黒漆や螺鈿（らでん、ケージ一、ケーウキーン）もあるが、春慶塗の文机が一般的である。厚さ約20センチメートルの屋久杉の1枚



懸硯

板で作り、板脚には丸や宝珠形などをくりぬき下に畳ずりをつけた。

村学校や学者の家では本箱を後ろにした師匠（ウシジョウ）が硯屏（けんびょう）や硯箱や字指（ジーサシ）や栞（しおり、ユミザン）を置いた文机と小見台を前に、割鞭（わりむち、ワイブチ、約70センチメートルの丸竹の3分の1を残して先を茶せんのように細かに割ったもの、罰する時に手をたたく）を横に置いて指導した。

文台のように高くして椅子（いし、イー）を必要とするものを唐卓（トークン）といい、前卓（まえじょく、ウトークン）にはミジフィチと称する幕で飾る。前卓をメージュクという場合は葬列の際に喪主の前に行く位はいのをせた卓をいう。香卓（こうしょく）のことを中央卓（チュートークン）といい、香炉の外に香合、火道具立を上置き、下に花生をのせた。

（城東小学校々長）

## 博物館協議会報告

昭和58年度の博物館協議会は、第1回目を6月22日に招集、10人の委員に対し辞令交付を行い、第2回目を11月29日に行った。第2回目は館長から「博物館の施策について」という諮問がありそれに対する答申作成のための会議であった。答申の主な内容は次の通りである。

### 1. 博物館の性格について、

現在は総合博物館として運営されているが、敷地や建物の狭隘さという点でとても総合という条件を充たすことは不可能であり、さらに首里という歴史的な地域に位置していることを考慮に入れて将来は専門的な性格を持つ歴史博物館にすることが望ましい。

### 2. 建築構想について

建築後30年目にあたる昭和71年を節目として改築する方向で構想を進めること。

### 3. 敷地の環境整備について

現在残っている石垣の補修も併せて将来は環境整備をしていくこと。

### 4. 展示について

時代に即応した展示方法に切替えるべきである。

### 5. 緊急課題

62年の国体に向けてスポーツ芸術部門の展示を悔いなく成功させるために前記の4項は早急に解決すべきである。

以上であるが、答申の処理については会長が館長に手交した上さらに県教育長へも説明することになっている。

## 「友の会」より図書寄贈さる



去る12月7日、県立博物館友の会（宮里朝光会長、会員163名）から図書の寄贈がありました。これは、友の会事業の一環として行われたもので、図書費の少ない当館にとって最大の贈り物でした。なお、寄贈図書は教育普及員詰所に置き利用していただく予定です。

### 〈図書目録〉

- 沖縄大百科事典 全3巻、別巻
- 沖縄の地理—島の自然と生活
- 沖縄植物野外活用図鑑 全6巻
- 沖縄の生物—生態写真集

## —研究室の窓から—

### 民俗芸能

宜保 栄治郎(副館長)

國學院大学を出て民俗学を勉強しているうちに、次第に琉球歌謡や民俗芸能の分野に手を染めるようになった。出身の村である名護市の屋部が年中行事、盆踊り、村遊びの宝庫であり、その知識が私の支えになっているようだ。昭和35年8月に伊江島の民謡を調査したのが最初でその後与那国、西表、竹富、宮古、沖縄本島、奄美と足かけ23年も調査にとび廻っていることになる。

民俗芸能の中でも特に八重山のアカマター、クロマター、マユンガナシ、宮古のパート、沖縄の長者大主、ミルク等のように祭の時に降臨する米訪神に近頃は興味を持つようになってそれをまとめたかと思っている。とは言え、那覇に住んでいる事と、琉球舞踊入門を書いた読みで日頃は古典舞踊の鑑とそのパンフレット書きに追われ遅々として研究は進んでいない。

## ◆博物館資料寄贈者名簿(敬称略)

(昭和58年4月～11月)

数多くの方々から、たくさんの資料を寄贈していただきました。博物館資料として大切に保存、活用させていただきます。今後とも当館の充実のために御協力下さいますようお願い申し上げます。

【動物】明仁親王殿下(クロオビハゼ2点) 【歴史】安良城政効(御物城職補任辞令書他18点、那覇市)、大浜道子(拓本梅の図他2点) 【美術工芸】大浜道子(鯉の図他7点)、外間完英(桐板白地に竹鳥紋様袷上衣他1点、那覇市)、伊波善弘(黒釉塩壺、石川市)、堀尾青史(黒漆草木人物螺鈿碗、東京都)、又吉康美(鴨口与那、宜野湾市) 【民俗】中村隆志(アルマジロ皮のハンドバッグ、那覇市)、喜納賢栄(花生、那覇市)、大城昌栄(獅子頭、中城村)、仲松蒲戸(民家模型、中城村)、仲松蒲太(ヤーマ他2点、中城村) 仲本政裕(厨子ガメ、那覇市)、徳田安隆(人間の大腿骨製笛、那覇市)

沖縄県立博物館だより

No.17・18

発行年月日 昭和59年1月20日

編集・発行 沖縄県立博物館

住 所 〒903 那覇市首里大甲町1-1

TEL. 0988-86-4353  
84-2243